

詩篇102篇

0 悩む者の祈り。彼が気落ちして、自分の嘆きを主の前に注ぎ出したときのもの

《第一部：悩みの日》

- 1 【主】よ。私の祈りを聞いてください。私の叫びが、あなたに届きますように。
- 2 私が苦しんでいるときに、御顔を私に隠さないでください。私に耳を傾けてください。私が呼ぶときに、早く私に答えてください。
- 3 私の日は煙の中に尽き果て、私の骨は炉のように燃えていますから。
- 4 私の心は、青菜のように打たれ、しおれ、パンを食べることさえ忘れしました。
- 5 私の嘆く声で私の骨と皮はくっついてしまいました。
- 6 私は荒野のペリカンのようになり、廃墟のふくろうのようになっています。
- 7 私はやせ衰えて、屋根の上のひとりぼっちの鳥のようになりました。
- 8 私の敵は一日中私をそしり、私をあざける者は私を名ざして毒づきます。
- 9 これはみな、私が、パンを食べるように灰を食べ、私の飲み物に涙を混ぜ合わせたからです。
- 10 それはあなたの憤りと怒りとゆえに、あなたが私を持ち上げ、投げ出されたからです。
- 11 私の日は、伸びていく夕影のようです。私は、青菜のようにしおれています。

《第二部：定めの時》

- 12 しかし、【主】よ。あなたはとこしえに御座に坐着、あなたの御名は代々に及びます。
- 13 あなたは立ち上がり、シオンをあわれんでくださいます。今やいつくしみの時です。定めの時が来たからです。
- 14 まことに、あなたのしもべはシオンの石を愛し、シオンのちりをいつくしみます。
- 15 こうして、国々は【主】の御名を恐れ、地のすべての王はあなたの栄光を恐れましょう。
- 16 なぜなら、【主】はシオンを建て、その栄光のうちに現れ、
- 17 窮した者の祈りを顧み、彼らの祈りをないがしろにされなかったからです。
- 18 次のことが、後の時代のために書きしるされ、新しく造られる民が【主】を賛美しますように。
- 19 【主】はその聖なると高き所から見おろし、天から地の上に目を注がれました。
- 20 捕らわれ人のうめきを聞き、死に定められた者を解き放つために。
- 21 人々が、【主】の名をシオンで語り、エルサレムで主を賛美するために。
- 22 また、国々の民や、王国が共に集められるとき、【主】に仕えるために。
- 23 主は私の力を道の途中で弱くされ、私の日数を短くされました。
- 24 私は申しました。「わが神よ。私の日の半ばに私を取り去らないでください。あなたの年は代々に至ります。
- 25 あなたははるか以前に地の基を据えられました。天も、あなたの御手のわざです。
- 26 これらのものは滅びるでしょう。しかし、あなたはながらえられます。すべてのものは衣のようにすり切れます。あなたが着物のように取り替えられると、それらは変わってしまいます。
- 27 しかし、あなたは変わることがなく、あなたの年は尽きることがありません。
- 28 あなたのしもべらの子孫は住みつき、彼らのすえは、あなたの前に堅く立てられましょう。」

本篇は長さに「中篇」に分類され、ある詩人が深い悩みの中にあったときに謳われたものと考えられています。個人的な苦悩がその全体を占めていますが、後半で「シオン」という表現が繰り返されるところから、詩人がイスラエル民族全体の苦しみをも念頭に置いて語っていることが窺えます。書かれた時期は捕囚末期が想定されますが、実現しつつある祖国への帰還の希望と、自分が苦悩から救い出されることが重ね合わせて見られているようです。

詩人の心の動きを理解するために、人称代名詞を中心に色付けしてみました。第一部に多く出てくるのは「私」であり、詩人が自分のことで押しつぶされそうになりながら「主」「あなた」に呼びかけていることが分かるでしょう。ところが、第二部に入ると「私」はほとんど消え、「主」「あなた」の割合が圧倒的に多くなります。更に、第二部の後半では、「新しく造られる民」「人々」「国々の民や、王国」「あなたのしもべらの子孫」「彼らのすえ」などの表現が現れ、詩人の目が同胞や諸外国の民に向き始めていることが分かります。23～24 節でちらりと自分の窮状が思い出されるものの、最終的には神に目を向け民の祝福を祈ることで締めくくられていきます。

この詩人がどのような状況下に置かれていたのかは、具体的には分かりませんが、命が削られ（3 節、11 節）、肉体は疲弊し（3～5 節）、社会的にも孤立状態にあり（6～8 節）、神に見放されたかのような心境にあった（9～10 節）と言えるでしょう。それにしても、自分の窮状を訴える詩的表現の豊かさには舌を卷きます。

「私の日は煙の中に尽き果て、私の骨は炉のように燃えていますから。」（3 節）

「私の心は、青菜のように打たれ、しおれ、パンを食べることさえ忘れました。」（4 節）

「私の嘆く声で私の骨と皮はくっついてしまいました。」（5 節）

「私は荒野のペリカンのようになり、廃墟のふくろうのようになっています。」（6 節）

「私はやせ衰えて、屋根の上のひとりぼっちの鳥のようになりました。」（7 節）

「これはみな、私が、パンを食べるように灰を食べ、私の飲み物に涙を混ぜ合わせたからです。」（9 節）

「私の日は、伸びていく夕影のようです。私は、青菜のようにしおれています。」（11 節）

神に祈るとき、私たちは「苦しいです」「助けてください」「いつまでですか」と叫ぶことがあるかもしれませんが、しかし、この詩人のように自分の状態を客観的に見つめ、「今の私はこうです」「ご覧ください」と訴えることができたなら、私たちの祈りには苦しみの中にあっても尚も冷静な視点が加えられていることになるでしょう。

第二部に入ると、詩人の目は「シオン」を顧み給う主に向かいます。自分の窮状ばかりを見つめていた彼に何が起きたのでしょうか。イスラエルの民が経験してきた50年以上に及ぶ捕囚の苦しみの中に、自分の苦悩を位置づけることができたのかもしれません。そして、その民を愛さしておられる神を思い起こし、自分という個人にも恵みが注がれていることに気づいたのです。私達も「キリストのからだなる教会」に連なる者であるならば、ご自身のからだを大切になさる主イエスの慈しみの下に置かれていることを思い起こすことができます。詩人が同胞にまで目を向けられるようになったのは、その仲間たちも自分と同じように「神の民」を形成している「主のからだ」であるという視点が与えられたからです。民の中の誰かが苦しめば、他の器官も共に苦しむ。詩人は、苦しみの中にあるのは自分だけではないことに目が開かれていったのでしょう。

しかし、そうは言っても、目の前の現実はずっと私たちに追いついてきます。23～24節で再び詩人が足下を見つめたのも頷けるのです。私たちは痛みを感じる人間であり、辛いことは辛く、悲しいことは悲しい、それが真実ではないでしょうか。神に対して強がったり、やせ我慢をしたりする必要はありません。ありのままの自分を主の御前に告白すればよいのです。主は私たちが祈るから、私たちのことをすべてご存知だからです。

祈りをささげた詩人はもはや自分だけのことで打ち萎れてはいませんでした。彼は最終的に、「私」をも「あなた(わが神)」をも「あなたのしもべらの子孫」「彼らのすえ」をも見つめていました。

私たちも、何らかの苦しみの中にあるとき、一時はその問題に押しつぶされそうになり、自分のことで頭が一杯になってしまうかもしれません。しかし、主に自分の窮状を訴えて祈るとき、新しい視点が与えられていきます。主の栄光が誉め讃えられることを望ませ、隣人にも心を留めさせて、どんな時にも共にいてくださる主を心の中心に置かせてくださるでしょう。